

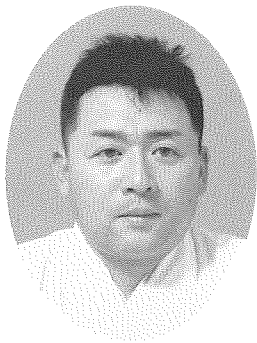
柳 葵 祭



三重県神道青年会報 第32号

一年を振り返って

会長 中野 雅史



平成十七年度の会務も早一年の歳月が過ぎようとしています。平素は青年会の活動に格別のご理解・ご協力を頂いていますことに厚く御礼を申し上げます。

さて、昨年は青年会にとりましても意義のある年でありました。神宮式年遷宮の御事につきましては、五月二日に遷宮諸祭の嚆矢である山口祭・木本祭が斎行され、木曾谷国有林と御治定を拝した御

ご協力を得て、盛大に奉迎・奉送を申し上げ、無事神宮にお運びする事ができました。青年会におきましては、御神木を三重県下で迎えし、御樋代木奉迎送行事の中で、神社庁ご指導のもと目的の御神木車両の誘導や、公道において行事の準備・警備などを行いました。また、御神木の御宿泊地の桑名神社と三重縣護國神社においては、仮眠を取りながら夜間警備なども行いました。これら一連の行事を体験させて頂きましたことはこの上ない光栄と思っております。

また昨年は、先の大東亜戦争が終結してから六十年という節目の年でありました。天皇陛下にあらせられました、終戦六十年にあたり全国の護國神社五十二社に、畏くも御幣帛料を賜りました。私が奉職致します三重縣護國神社では、十月の秋季慰霊大祭に併せ、終戦六十年臨時大

祭を斎行し、御神前に奉獻りました。青年会役員の皆様方には、二日間に亘りご参列を頂き、篤く御礼を申し上げます。

終戦より六十年が経ち、改めて祖国の平和と繁栄の礎となられた御英霊の純粋な心を心として慰霊顕彰の為に、尚一層のご遺徳の発揚に努めていかなければなりません。特にご遺族の高齢化が進む中、その遺徳顕彰を次世代へと継承する為、若い世代に対して靖國神社・護國神社への参拝を勧奨する事が重要であると思えます。先の大戦において祖国の為、愛する人や家族を守る為、尊い命を捧げられま



した御英霊に心から感謝を申し上げます。御霊が安らかに御鎮まりいたたく事を祈り、国民が一丸となって靖國神社・護國神社への参拝を願っています。小泉首相の靖國神社参拝については、相変わらず中国や韓国の内政干渉とも受け取れる圧力が止みません。また、国内においても首相の参拝が違憲であるとの訴訟が起こされています。このような状況でも国民を代表する首相には、今後も靖國神社参拝の定着を切に願います。

最近、青年会員の減少により、活動力の低下が問題となってきました。おりましたが、諸先輩方が築いてこられたこの歴史と伝統のある会を会員皆様の強い結束と厚い信頼をもって盛り上げなければなりません。その為には、尚一層会員の皆様が積極的に行事や活動に参加することが重要です。共に汗して活動することで互いに分かり合い、青年会として、更に青年神職としての使命が果たせるよう力を合わせていきたいと思えます。今後とも更なるご理解とご協力を頂き、より一層のお力添えを賜ります事をお願い申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。

総務・広報委員会

委員長 佐藤 了古



昨年度までの二年間は、渉外・福祉委員会に所属しておりましたが、今期は総務・広報委員長として活動することになりました。前期に増して重要な役割を担うこととなり恐縮しておりますが、期待に沿えるよう先輩諸兄の指導を仰ぎつつ務めて参ります。

総務・広報委員会の役目は、一言で言うと神道青年会の活動を記録に残し、会員に伝えること。年間の行事を夏と冬に時期を分けて紹介する『神青通信』と年間の会報誌『榊葉』の編集及び発行を主な活動内容としております。また、他の委員会の活動において必要とされるチラシ等の配布物を作成し活動の広報面をサポートしております。

『神青通信』及び『榊葉』は各行事に参加した会員に原稿を依頼し、その原稿をもとに総務・広報

委員会の中で校正・編集を行います。会員から届けられる原稿は多種多様。編集のため委員会での検討は午後十時を廻ることもありますが、その結果として作業を通じて学んだことがいくつもありました。まず、各人の文章表現が違っており、その個性を生かしつつ整理するという点。そして、担当者が行事をどのように見たのか、それが内容においてとても重要なことだということ。記事を読んで、誰もが行事の内容を知ることができると。当たり前すぎる事ですが、全ての会員が活動に参加できない中では、よく吟味する必要があります。その為にも、原稿を編集する立場の私達も行事に参加することが大切であると実感しました。

今年度の活動をふり返り、個人の感想として、会員皆がそれぞれ神社の奉務がある中で、神青会の活動に参加し協力して一つの事業を成し遂げることは、とても意義深いことと考えます。同世代の仲間と、互いの知識や経験を持ち寄り、協力するなかでお互いが成長できればと願っております。次年度も皆様のご協力を宜しくお願いいたします。

教化・研修委員会

委員長 石上 陽 祥



本年度より教化・研修委員長を仰せつかり、早一年が過ぎました。総務・広報委員会から教化・研修委員会に移り、しかも委員長就任と初めての事ばかりで、右往左往しながらも滞りなく諸行事を終えられましたのは、各神社の宮司様を始め職員皆様の温かいご支援とご協力の賜と、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

事業をふり返ってみますと、昨年度は台風の影響のため中止となつた「お宮の子供会」は、二見興玉神社に於いて開催できました。参拝の作法を始め、諸行事を通じて互いに協力し合う心を学び、子供達には良い思い出になったと思えます。

神宮・県神青合同研修会では、現在の日本の安全保障について学ぶため、自衛隊から講師をお招きして開催しました。自衛隊の現状、また海外におけるPKO（平和維

持）活動の話を行いました。今、自衛隊は否応なく組織を大きく変化させる途上にあります。単なる国土防衛の組織からあらゆる危機に対応して国を守る組織へと変貌する自衛隊の姿こそ国際化を迫られた日本に必要な事だと考えます。

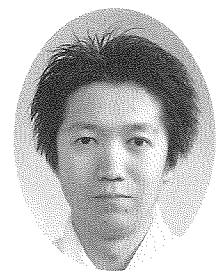
神道青年東海地区協議会教化研修会では、当番県として四日市市で開催しました。御遷宮を技術の伝承という面から学ぶべく、京都より講師をお招きし、鋳金具についてのご講義を頂きました。会長始め全員で力を合わせて準備に取り組みました。参加した皆様には満足して頂いたと思っております。

青年会は挑戦のできる場であり、失敗を恐れず突き進むことができると。それは、山のようにどしどしと見守ってくださる諸先輩方と、各奉仕神社で経験を積み知識をもつた会員が集まって、知恵を出し合い一丸となって物事に取り組んでいけるからです。これが青年会の醍醐味であると考えます。

次年度も教化・研修委員会は、一致団結して事業に取り組んでいきたいと思えます。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますことを切にお願い申し上げます。

渉外・福祉委員会

委員長 神田 基



本年度の事業は、新たな試みとしてフットサル

ルを行った「新職員交流会」、本年度よりブロックごとに活動して広がりをもたせた「建国記念の日啓発活動」、鳥取県での「県外研修会」、個人の趣味で交流を深める「サークル活動」と様々な活動をする事が出来ました。

さて、毎年福祉活動につきましては、それらしい活動が出来ずにはありません。我々が神と人との仲執り持ちであるならば、神社と福祉の仲執り持ちも出来るはずで、闇雲に福祉に走るのではなく、互いをよく理解し、最も良いかたちを探すこと。これもまた福祉であると思えます。ともすればタブーとされ、腫れ物に触るような問題に敢えて立ち向かい、話し合い、青年神職としての意見を述べる。これが青年神職の在るべき姿であり、それが出来るのが神道青年会であると思えます。

フリー化され、充実してまいりました。そのような風潮の中、神社に於いても「何故？」と批判を浴びることも多々あります。ですがこのままではよろしいのでしょうか。神社は観光施設ではありません。誰でも自由に参拝できることは大切なことですが、神社が神社としての役割や景観を崩してはなりません。我々が神と人との仲執り持ちであるならば、神社と福祉の仲執り持ちも出来るはずで、闇雲に福祉に走るのではなく、互いをよく理解し、最も良いかたちを探すこと。これもまた福祉であると思えます。ともすればタブーとされ、腫れ物に触るような問題に敢えて立ち向かい、話し合い、青年神職としての意見を述べる。これが青年神職の在るべき姿であり、それが出来るのが神道青年会であると思えます。

フリー化され、充実してまいりました。そのような風潮の中、神社に於いても「何故？」と批判を浴びることも多々あります。ですがこのままではよろしいのでしょうか。神社は観光施設ではありません。誰でも自由に参拝できることは大切なことですが、神社が神社としての役割や景観を崩してはなりません。我々が神と人との仲執り持ちであるならば、神社と福祉の仲執り持ちも出来るはずで、闇雲に福祉に走るのではなく、互いをよく理解し、最も良いかたちを探すこと。これもまた福祉であると思えます。ともすればタブーとされ、腫れ物に触るような問題に敢えて立ち向かい、話し合い、青年神職としての意見を述べる。これが青年神職の在るべき姿であり、それが出来るのが神道青年会であると思えます。

役員紹介

- 会長 中野 雅史 三重縣護國神社
- 副会長 高橋 弘幸 神宮
- 中野 哲彦 多度大社
- 総務・広報委員会 佐藤 了古 神宮
- 原 忠照 八阪神社
- 宮田 幸尋 敢國神社
- 小倉 孝之 二見興玉神社
- 教化・研修委員会 石上 陽祥 津八幡宮
- 冷泉 光一 神館神社
- 遠藤 嘉章 彌都加伎神社
- 日紫喜康史 多度大社
- 佐藤 直道 椿大神社
- 渉外・福祉委員会 神田 基 猿田彦神社
- 矢野 啓之 頭之宮四方神社
- 濱中 孝成 中村神社
- 鏡谷 嘉樹 神宮
- 西本俊一朗 神宮
- 監事 山路 太三 磯部神社
- 内保 隆幸 比々岐神社
- 顧問 福田 和人 二見興玉神社

会務報告

- 〔平成十七年四月〕
- 二日 神社総代会定例総会
- 九名助勢奉仕 神宮会館
- 二七日 第五七回神青協定例総会
- 四名出席 神社本庁
- 二八日 平成十六年度総会
- 二三名出席 神社庁
- 平成十五・十六年度卒業式
- 二三名出席 津市内
- 〔五月〕
- 一日 東海五県連合総会助勢奉仕
- 一〇名助勢奉仕
- サンアリーナ
- 三〇日 第一回役員会
- 一四名出席 神社庁
- 〔六月〕
- 八日 御樋代木奉送迎助勢奉仕
- 三〇名助勢奉仕
- 桑名・四日市・津・伊勢
- 〔七月〕
- 二日 第二回役員会
- 一六名出席 神社庁
- 八日 神道青年東海地区協議会
- 八名出席 神宮会館
- 二日 新職員交流会
- 三四名参加 県営総合競技場・神宮会館
- 〔八月〕
- 二・三日 第二七回お宮の子供会
- 一三名参加 二見興玉神社
- 六日 第十回神社スカウト全国大会奉告祭
- 五名奉仕 サンアリーナ
- 八日 第十回神社スカウト全国大会執行事

定例総会

平成十六年度定例総会が四月二八日、神社庁会議室にて中野会長以下役員、会員二三名、来賓三名の出席にて開催された。

開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の片岡昭雄三重県神社庁長・小倉基績三重県神社庁青年会担当理事・久保安治三重県氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後音羽副会長を議長に選出し議事へと移った。

まず会長より十六年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告が行われ、夫々承認された。次に中野会長任期満了に伴う役員改選が行われた(前頁参照)。続いて十七年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算案が審議され、承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。



新職員交流会

七月十二日、伊勢市の県営体育館において新職員交流会が開催された。中野会長を始め三十四名(内新職員十六名)が参加し、フットサルが行われた。

フットサルとは室内で行うミニサッカーのようなもので、その手軽さから年齢・性別を問わず楽しまれているスポーツである。チームは各ブロックを基本に男性四名女性二名の混合チームを作り、リーグ戦方式で試合が行われ、白熱した試合が繰り広げられた。当初、サークル活動にてフットサルに汗を流す者の多い南部チームが優勝かと思われたが、打倒南部に燃えていた北部第一チームが優勝。終了後は神宮会館に場所を移して表彰式・懇親会が行われ、互いに交流を深めた。



お宮の子供会

第二十七回お宮の子供会は八月二・三日に二見興玉神社(片岡昭雄宮司)にて開催された。初日、正式参拝の後、班名の決定及び班旗を作り、その後マカップの作成やゲームが行われ、夜にはキャンプファイヤー、花火を行った。

翌日、早朝より二見の海岸にて清々しい空気の中、禊が行われた。子供達は「冷たい」と口にしたが、海へ入っていったが、大祓詞が奏上されると雰囲気を感じ、手を合わせ真剣に禊を行っていた。その後、二見シーパラダイスへ移動し館内を散策し、最後に海岸の清掃奉仕を行い、日程を終了した。



後日、参加した子供達の親より「子供が大変喜んでいたので来年もぜひ参加させたい」と伺い、役員一同も光栄に思うと共に、次回に向けて尚一層楽しく有意義なものが出来ればと考える次第である。

(矢野 記)

- 二九・三〇日 一四名奉仕 二見浦 神青協夏期セミナー 六名参加 神社本庁
- 〔九月〕
- 一日 第三回役員会 一六名出席 四日市市内
- 五・六日 神道青年東海地区協議会及び教化研修会 一五名参加 四日市市内
- 一六日 敬神婦人連合会定例総会 助勢奉仕 七名奉仕 神宮会館
- 〔一〇月〕
- 六日 第四回役員会 一五名出席 神社庁
- 一五・一六日 第三二回初穂曳 一名参加 伊勢市内
- 三一日 三重県神社関係者大会助勢奉仕 一四名奉仕 神宮会館
- 第五回役員会 二名出席 神宮会館
- 〔一一月〕
- 一七日 神宮神青・県神青合同研修会 一六名参加 神宮司庁
- 二六日 中部ブロック研修会 二三名参加 三重護國神社
- 〔一二月〕
- 三日 神宮大麻頒布促進運動 一六名参加
- 五日 名張市・百合が丘 敢國神社例祭助成奉仕 四名奉仕
- 六日 北部ブロック研修会 一八名参加 多度大社
- 八日 第六回役員会

神青協 夏期セミナー

八月二十九、三十日の二日間に亘り本社本庁に於いて夏期セミナーが開催され、本県からは中野会長を始め六名の会員が参加した。今回は『誇り高き日本』と英霊の名譽を回復し正しく語り継ぐ為に『をテーマに四氏によるご講義を頂いた。

初日は、元第二次イラク復興業務支援隊隊長の今浦勇紀氏、帝京大学教授の志方俊之氏によりそれぞれご講義を頂き、翌日は上智大学名誉教授の渡部昇一氏、参議院議員外交防衛委員の山谷えり子氏により各々の専門分野をテーマにご講義を頂いた。

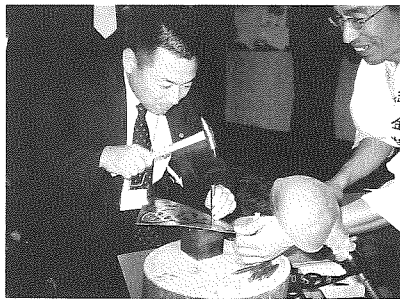
今回のセミナーに参加して、改めて憲法改正及び教育改革が必要であると実感した。今日の我が国は、国を愛する心を育てず、国民として基本的な思想となるべき歴史を歪んで教育し、マスメディアによる局所的な報道がなされているのが実情である。正しい歴史、愛国心を教化すべく、我々の役目は大きいと再認識した研修会であった。(池田 記)

神道青年東海地区協議会 教化研修会

九月五、六日の二日間四日市市のザ・プラトンホテルに於いて神道青年東海地区協議会教化研修会が開催され五十四名が参加し、三重県からは中野会長始め十五名が参加した。

初日は神道青年東海地区協議会総会が開催された。年間の活動における各種議事が了承された後、本総会の決議として、本年は日露戦争戦勝百年、大東亜戦争終結六十一年の節目の年であり、御遷宮元年の年であるので、当地区会員一丸となって積極果敢に運動に邁進すべく、決議文が採択された。

続いて研修会に移り、はじめに開講式では来賓の片岡昭雄三重県神社庁長より我々青年神職への期待を込めた温かい祝辞を頂いた。今回の研修会は「神宮式年遷宮と鍔金具―技術の継承、こころの継承―」を主題とし、榊森本鍔金具製作所取締役会長森本安之助氏を講師に迎え、ご講義を頂いた。鍔金具とは社寺建築の奉飾、御神宝や威儀物等の装飾金具類のこと



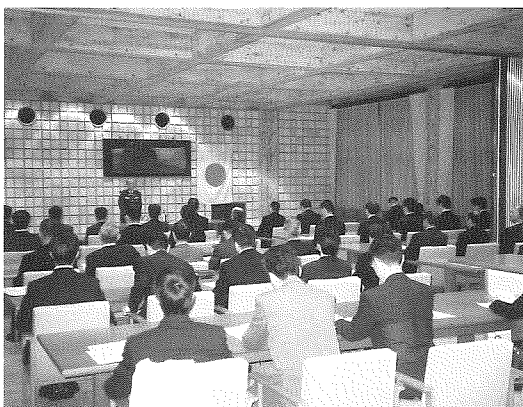
とであり、先生は京都にて、連綿と守られてきた技術を自身の腕で伝えておられ、神宮、全国の神社仏閣を手がけてこられた。先生の「技術と伝統文化の継承はこころの継承ですよ」との言葉がとても印象的であった。また、講義の中では金打ちを実演して頂き、お持ち頂いた数十点の鍔金具を実際に見ることに、数名が金打ちを体験した。講義の後には同ホテルにて懇親会となり、先生も同席のもと活発な意見交換も行われた。翌日はボウリング大会を行い東海地区の会員同志の親睦を深めた。

(中野 昇記)

神宮神道青年会との 合同研修会

十一月十七日、神宮司庁において三重県神道青年会と神宮神道青年会との合同研修会が開催された。本年は自衛隊三重地方連絡部長鈴木伸一先生を講師に迎え、「日本の安全保障について」と題し講義を頂戴した。

本年は先の大戦が終結してから六十一年の節目にあたる年であり、又近年取り沙汰される、北朝鮮を始めとする近隣諸国との関係など国防問題が再認識される年であった。このような現状を踏まえた上で、先生を招いての研修会である。



講義では、安全保障の概念が国土・国民・主権を守るという前提の中、その意識が戦後六十年、国民にとっては薄くなっていること。そして現在、従来の国家間の脅威だけでなく、新たな非対象の脅威(無差別テロ)の問題に対して、日米間における安全保障体制の強化をはかり、我国に直接脅威が及ぶことを防止・排除し、恒久平和に務める自衛隊の努力などをご説明頂いた。加えて自国自衛の問題解決だけでなく、近年イラクにて行われている復興支援活動をはじめ、国際規模での貢献・協力についても、新聞やニュースでは得ることが出来ない、実体験を踏まえた現地での話なども聞かせて頂いた。

(西本 記)

神宮大麻頒布促進運動

本年度の神宮大麻頒布促進運動は、本社本庁が提唱する「一千万家庭神宮大麻奉斎運動モデル支部制度」を実施するのに伴い、三重県神社庁が指定する名張支部内の百合が丘団地に於いて十二月三日に行われた。

当日は当会より中野会長始め十六名、また神宮神道青年会・神宮研修所の学生も参加し、名張支部の神職・総代・敬神婦人会など総勢約百名が奉仕した。

まず、午前九時より宇流富志禰神社(中森孝栄宮司)にて、大麻頒布始祭が斎行され、今回の頒布地区の百合が丘団地に移動し活動を行った。

頒布の方法は神社総代二名と神職一名の三名一組で三十三班に分かれ一軒ずつ隈無く訪問し、神宮大麻のみ授与した。約二二〇〇戸中、一九五五体を頒布することができた。土曜日ということもあり、家族で休日を通り越している家も多かったが、なかなか受けてもらえず、インターフォン越しに断られることもあった。しかし、例年西桑名ネオポリスでの大麻頒布活動を行って



いる我々神青メンバーは、これまでの経験を生かし確実に対応した。

これまでの活動と比較すると一人が一日で回る軒数が少なく、余裕をもって訪問できた。神職だけでなく地元の総代さん等と一緒に行動した事で、訪問先の人との会話がスムーズにでき、専門的な質問を受けた際は、我々神職が説明をするといった状況も可能であった。

今後の課題としては、全般的に「大麻」が「お札」であるという認識が低いため、「神宮大麻」という言葉の知名度を上げることが必要だと感じた。そのような現状にも拘わらず、今回のモデル地区の大麻頒布活動はある程度の実績を残すことができたと思う。来年も継続し、より多くの神宮大麻を頒布できるよう青年神職として活動をしていかなければならない。

(中野 哲彦 記)

建国記念の日 啓発運動

この活動は、広く国民にとりわけ次世代を担う青少年を対象に、建国記念の日奉祝の意義を伝えるべく、花の種を添えたチラシを配布するという内容のものである。三回目の本年は、活動を四つのブロックに分け、各ブロックの企画のもと展開された。

北部ブロック

活動日 二月八日

場所 近鉄四日市駅前

参加者 八名

小雨の降る寒い中、若者を中心とする多くの方に、懸命に呼びかけた。

我々が白衣姿という近づくことと戸惑う姿も見られたが、



「お疲れ様です、頑張ってください」と励ましのお言葉を頂くこともあった。今回の活動により、建国記念の日を始め祝日について一人でも多くの方に正しく理解して頂ければと願う。(鈴木 記)

中部ブロック

活動日 二月五日

場所 津駅西口周辺

参加者 二十名(スカウトも含む)

当日は朝から雪が舞い、大変厳しい寒さであったものの、スカウトらの元気の良い発声や、無邪気な笑顔に吸い寄せられるかのように、種を添えたチラシは瞬く間に無くなってしまった。

この活動を通じて、ひとりでも多くの方の正しい理解、伝承の一助になり、豊かな精神文化の興隆を一同



は願うばかりである。(榊原 記)

南部ブロック

活動日 二月九日

場所 伊勢市駅前・おかげ横町

参加者 四名

伊勢市駅前配布を開始したが、場所と時間帯の問題で通行人が少なく、急遽おらい町へ移動した。



中高生が中心にはならなかったが、全国から集まった方々に配ることが出来た。建国記念の日をあまり気にしていない人も多くいたが、花の種を受け取ると「その日に種を蒔きます。ご苦勞様です。」と言葉をかけてくれる人もいて、心が温まった日であった。(濱中 記)

神宮ブロック

活動日 二月四日・五日

場所 宇治橋前

参加者 四日六名・五日十三名

(五日はスカウトも含む)

両日共に小雪が舞い、寒風の吹きすさぶ中ではあったが、参加者は皆元氣よく声を出し、笑顔で参拝者に向かっていった。大御神様の御陰もあったのか、五百ずつ用意した種を添付したチラシが、両日共に十分程で全て無くなっていった。津駅周辺で行われた昨年までの印象とは大分違ったが、参拝者の方から手を伸ばしてくる状況に驚きと感動を覚えた。(佐藤 記)



氏子青年協議会との合同研修会

三月四日、伊賀市において本会と氏子青年協議会との合同研修会が開催され、氏青側は中森秀治会長始め三十六名、本会からは中野副会長始め七名が参加した。

今回は「暮らしの中の神々」をテーマに、城下町の風情が残る市内を散策しながら研修するというものであった。両会は、今年度新たに氏青に入会された平井神社(直井清宮司)に集合し、正式参拝・開会の諸行事の後、旧小田小学校(三重県文化財指定)から中井酒造場、森本仙右衛門商店、田楽座「わかや」まで、伊賀市の伝統的な建造物・物産を守り伝えている方達の説明を聞きながら見学して回った。酒造場では製造の殆どが機械化されている中、匠にしかできない部分があるところから窺えた。

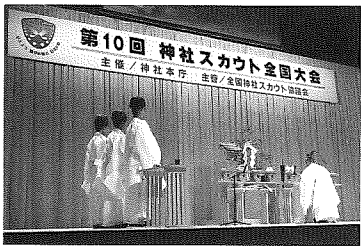


研修会終了の後、懇親会となり地酒を頂きながら有意義な時間を過ごした。(宮岡 記)

第十回 神社スカウト全国大会

第十回神社スカウト全国大会は「伝えよう鎮守の森と日本の心」をテーマに、八月六〜九日の四日間、伊勢市を中心に開催され、全国から二二〇〇余名のスカウトが参加した。

この大会にあたり、当会に諸行事への奉仕依頼があった。六日午後六時半より県営サンアリーナにて行われた開会式では、中野会長を斎主に役員五名の奉仕にて開催奉告祭を斎行し、矢田部正巳大会長らが玉串拝礼を行い、大会の無事を祈願した。また、八日の早朝より二見興玉神社境内龍宮社前にて行われた禊行事では、約五〇〇名のスカウトが参加し、小倉基績三重県神社庁錬成行事道彦のもと、中野会長始め十五名の役員・会員が助彦を奉仕した。(小倉 記)



神青協中央研修会

三月二十三〜二十四日にかけて、神道青年全国協議会中央研修会が、鳥取県米子市の皆生グランドホテル天水を会場に、「和魂(わこん)」を受け継ぎ伝ふべき日本人の心」をテーマとして、全国から三四七名の参加のもと開催された。

第一講は『国を護る心』我が国の「国防」の現状と課題」と題し、軍事学者の潮匡人氏の講義を拝聴した。潮氏は元三空佐という立場から、自衛隊が世界有数の戦力を持ちながら、実働に乏しい矛盾した状態にあるかを指摘し、一方で国民の危機管理意識の低さを訴えられた。本来軍隊が守るべきものは「国体」であり、その基盤である国語・歴史教育の荒廃を糺し、我が国の伝統文化を正しく後世に伝えていかななくてはならないと述べられた。

第二講は地元出身の漫才師、宮川大助氏による講演で、「神社と私との関係」タレント活動から見ること」と題し、全国各地を訪問し、その土地の神社を参拝したときの印象や感覚などを切々と語られた。第二講終了後、懇親会



が盛大に行われ、全国の神青会員と懇親を深め、翌二十四日の第三講は、元住友銀行本店人事部審議役、徳永園典氏により、「新しき神道の予感」と題し講演が行われた。先の大戦より六十年が経ち、今日経済大国として発展してきたが、物質中心の西洋の思想に被われ、我が国の美しい伝統文化が崩れかけている。今こそ正しい国語・国史を伝え、神道の理念を我が国はもとより世界に発信すべく、言挙げすべきときであると述べられた。研修会を終え、神明に奉仕する者として、日本人の崇高なる精神を培い、美はしき伝統文化の継承に努め、大御心を体して神徳の宣揚に邁進すべき立場にあることを改めて実感した。(菱川 記)

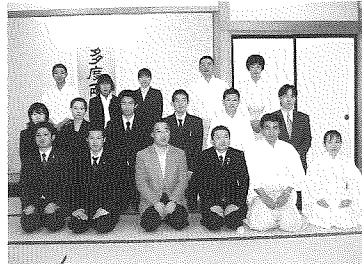
ブロック研修会

本年度で四回目を数えるブロック研修会は、共通のテーマを設けず各ブロックの創意工夫のもと執り行われた。

北部ブロック研修会

テーマ 初めての雅楽
講師 多度大社塚原徳生権宮司
開催日 平成十七年十二月六日
場所 多度大社
参加者 十八名

塚原先生より、雅楽の歴史やその特徴、楽器及び譜面等についてご講義頂き、その後鳳笙・箏・龍笛に分かれて、初めての方でも吹けるように経験者と一緒に練習をした。私も雅楽は初心者ながら、鳳笙を取り練習をさせて頂いた。先輩方に教えを受け、皆で練習すること



で参加者は少しずつ吹けるようになっていった。そして最後に多度大社職員の皆様による『蘭陵王』と『納曾利』の舞を見学した。神社に奉職する者として、雅楽は必要な教養でもある。今回の参加者が皆これを機会にさらに研鑽を積み、質の高い神明奉仕に繋がればと願うものである。

中部ブロック研修会

テーマ 終戦六十年について
講師 三重縣護國神社原光夫宮司
開催日 平成十七年十一月二十六日
場所 三重縣護國神社
参加者 二十三名

はじめにビデオ（「凜として愛」を鑑賞した。このビデオは、祖国のために力の限り戦った将兵と、銃後の守りに尽くされた全ての感謝と畏敬の念をこめてつくられたものであり、明治維新から大東亜戦争に至るまでの戦争の歴史について知識を深めた。その後、原先生による講義に移っ



た。本年は終戦六十年に当たり、天皇陛下には各護國神社に幣帛料を賜り、臨時大祭において御神前に御供えたこと、靖國神社の概要について、天皇陛下の靖國神社参拝など、充実した内容であった。

終戦から六十年が経ち、今後七十年、八十年と時が流れていくにつれて戦争のことや御英霊のことが風化されていくのではなく、御英霊顕彰のために、この研修会で学んだことを多くの人に伝えていきたい。

神宮・南部ブロック研修会

テーマ 神社とバリアフリー
講師 伊勢志摩バリアフリー ツアーセンター
開催日 野口あゆみ事務局長他
平成十八年二月七日
場所 神宮会館
参加者 四十四名

講義ではセンターの仕事内容とその役割・取り組み等、また映像機による県下各神社の施設について紹介があった。先生はセンターを現代の御師と位置付け、その土地ならではの魅力を障害者に情報発信し、最高のおもてなし（対応）ができる環境作りが大切であるとし、バリアフリーは「ハード面」の改善ではなく「ソフト面」（人の気持ち）がないと本当のバリアフリーではなく、それに健常者が「気付く」事の重要性を説かれた。また、講義後のディスカッションでは各班神社側、障害者側の立場で、「デイベート」（立場同士の意見交換）を行ない、神社のバリアフリーのあり方について、議論がなされた。今回の研修は講義を含め四時間及び、神社のバリアフリーについて今後の課題、解決策を模索する貴重な機会となった。



御樋代木奉迎送

平成二十五年に遷御の儀が予定されている第六十二回神宮式年遷宮の御用材を伐り始める御杣始祭が、六月三日に長野県木曾郡上松町の木曾谷国有林で厳かに斎行された。また、五日には岐阜県中津川市加子母の裏木曾国有林で御用材伐採式が行われた。

伐り出された御神木は各々トラックに積み込まれ、三重県には八日の午後五時三十分愛知県と岐阜県からの御神木が到着した。まず、桑名の掛斐川河川敷において御神木引継式が行われ、引き続き桑名神社まで奉曳行事が行われた。御神木には二十三台の石取祭車が付き添い、木遣りの掛け声と共に、約二万人が見守る中、出発した。桑名神社に到着後、奉迎祭が斎行され、その後私共青年会員は夜警を行い、無事に朝を迎えた。

九日朝、御神木を積み替え、奉送祭を斎行の後、四日市の聖武天皇社において奉迎祭が斎行された。その後内宮御料車は先に出発し、伊勢へと向かった。外宮御料車は鈴鹿、河芸にて大勢の出迎えを受

けながら三重縣護國神社に進んでいった。

外宮御料車は午後一時二十分津の上浜町に到着し、沿道には約八百名の人々が背中に「太一」と標された白の法被姿で出迎え、護國神社を目指して奉曳行事を行った。神社に到着後、奉迎祭が斎行された。引き続き郷土芸能が奉納され、御神木が無事に到着したことを皆で祝した。この夜も青年会員にて夜警が行われた。十日奉送祭斎行の後、外宮御料車は護國神社を出発、午前十時三十分度会橋東詰にて伊勢奉曳団への引継が行われた。

私はこの三日間、二十年に一度という貴重な経験をさせて頂いた事を光栄に思いました。これから七年後の遷御の儀に向かい、諸祭・諸行事が積み重ねられます。今回の奉仕により県下の氏子、崇敬者皆様の神宮への熱い思いを尚一層感じ、私も神職の一人として御遷宮に力を注ぎたいと思います。

(遠藤 記)

平成十八年中の御遷宮諸祭

諸行事について

四月十二日・十三日

御木曳初式

伊勢市に住む旧神領民が、御造営の用材を両宮に奉曳する伝統行事「御木曳」の始めに行われる儀式。正宮や別宮の棟持柱などにあてられる「役木」という代表的な御用材を、ゆかり深い特定の町の住民が神域に曳き込み、「役木曳」とも称する。

四月二十日・二十一日

木造始祭

御造営の木取り作業を始めるにあたって作事の安全を祈り行われる祭儀。五丈殿で饗膳の儀を行い、同殿前に安置してある御木曳初式で奉曳された御料木に小工が忌斧を打ち入れる。

五月五日〜七月三十日

御木曳行事（第一次）

伊勢市に住む旧神領民が二ヶ月にわたり御用材を両宮に曳き入れる盛大な行事。旧神領地における町内総出の晴れ舞台で、数日前に揃いの法被姿で二見浦に「浜参宮」をして心身を清めて行事に臨む。内宮の領民は木櫃に御用材を積載して五十鈴川で「川曳き」を行い、外宮の領民は御木曳車で「陸曳き」を行う。尚、期間中全国から「一日神領民」も参加する。

五月十七日

仮御樋代木伐採式

「遷御」の際、御神体を納める御器、「仮御樋代木」と「仮御船代」の御用材を伐採するにあたり木本に坐す神を祭り、忌斧を入れる式。

伝えていくもの

三重県神道青年会監事

内保隆幸

「神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊・孝元・開化・崇神」、父に良く聞かされた言葉である。父は昭和天皇までの歴代天皇の名前をすべて言えた。自慢げに良く聞かせてくれた。おかげで自分も十代までは空で言えるようになった。戦前は、歴代の天皇の名前を学校ですべて覚えたそうである。覚える是非は別にして、皇室の歴史の長さを知ることができた。現代の日本国民、特に戦後世代は天皇の名前を何人言えるであろうか。「神武天皇」の名前を知らない人も多いのではないだろうか。

今、皇室典範の改正の問題に伴って、皇室の歴史についての書籍が、書店に並ぶようになったが、皇室の歴史について話されることは戦後少ない。

戦前は皇室の歴史について批判することはタブー視されていた。その反動で戦後、「古事記」「日本

書紀」への批判、否定が行われた。中には二代から九代までの存在まで否定するものもある。

大学で古代史を学んだ。その時、記紀に対する批判をしている本を多く読んだ。戦後の歴史教育を受けてきた自分は素直にその内容を受け止められたし、その論説に小気味よさを感じ、そのような本を多く読んだ。しかし、違和感を覚えるようになってきた。神話を含め、批判するだけのやり方に共感できなくなってきた。そして、そんな中で記紀に政治的改作はあったとしても、そこには何かの事実があって書かれているという見方に出合った。そこから記紀への興味が深まっていった。特に神話に興味を引かれた。そして、神話と現在とのつながりを感じた。

戦後、アメリカの政策で西洋的ものの考え方が、日本に浸透した。学校などの教育の場で習うことと、祖父母、父母の教えてくれるとこ

ろに馴染まないことがあった。

今、神職として神明に奉仕している。その中で感じることは学校以外のところで学んだことが自分にとってとても大切な財産になっているのを感じた。

今、日本の国のよきところが見直されている。その一方で、失われていっている部分があるのではないか。戦後の教育を受けてきた私たち、先人の方々が残したすばらしい文化のうち、知らないことが多くある。自分で、自分の生き方、ものの見方を見つめ直し、それを知る努力が大切である。戦後失ったものを取り戻す取り組みは一人一人のそういう努力と共に得たものをより多くの人に伝えていくことを進めていかなければならない。



編集後記

昨年度の青年会の活動を振り返ると、式年遷宮の諸行事に関するもの、戦後六十年にあたり各方面で開催された行事が目につきました。日本人として守るべきもの、伝えるべきものを考えさせられた一年であったように思います。

私はこの『榊葉』の編集をしながら、ふと以前に職場の先輩から聞いた一つの言葉を思い出していました。「俺たちは一人一人が点なのだよ、その点が集まり、線となって、二千年の歴史という線を繋いで行くんだよ」と。格好良くもあり、少々照れくさい言葉ですが、祭典に奉仕する者としての崇高な精神を教え頂いたものと思っています。

神道青年会の活動を一本の線に喩えると、その先端にあるのは正に、私達と言えます。先輩たちから受け継いだ伝統と心をそのままに、今の私達が持てる自由な発想で素晴らしい線を描いていきたいと考える次第です。

(了古)

会報「榊葉」

第32号

平成18年3月31日

発行者 中野雅史

編集 総務広報委員会

発行所 津市鳥居町210-2

三重県社庁内

三重県神道青年会